

『助産婦』（日本助産婦会、
vol.52,no.1,1998）p.28～29

出産、助産婦、産婦の社会学的考察に向け
て

第1回

社会学的アプローチの紹介

白井千晶

早稲田大学大学院文学研究科社会学専攻

はじめに

社会学にとって出産は非常に魅力的な研究対象である。だが出産の現場にある人びとが社会学を魅力的なものであると考えているかどうかは疑問であり、また社会学の成果が出産の現場に反映されることは、これまでにほとんどなかったといってよい。

本稿および今後3回の連載では、社会学の研究成果をたんに紹介するのではなく、社会学から見た出産という社会現象の姿を提示することによって、助産婦の実践がいかに社会的な営みであるか、すなわちいかに社会学と密接にかかわっているものであるのかを示してみたい。

1. 戦前と戦後の不連続という常識

日本における出産介助者の歴史の中で最も大きな転換点は何かと聞かれたら、あなたは何と答えるだろうか。「戦後、GHQの

方針により助産婦は保健婦助産婦看護婦法のもとで看護の枠組みに組み込まれ云々」といった「通説」を思い浮かべる人が多いかもしれない。実際、それは間違いではない。ご承知のように、戦後になると、病院勤務助産婦の割合が急激に上昇し、また、出生証明書に記載される出生立会者のほとんどが医師となった。

2. 社会学からのアプローチ

同じ質問に対し、社会学者はどう答えるだろうか。例えば、「出産の社会学」の代表的研究者の一人、落合恵美子は西欧の出産、日本の出産の歴史を考察し、次のような説明を行った。まず、西欧の出産には二つの局面があるという（落合、1984）。第一局面は16世紀前後に開始される伝統的産婆の排除と出産介助職の教会秩序への取り込み、第二局面は18世紀後半に本格化する伝統的産婆から医師または近代的産婆への交代である。他方、日本の出産には、三つの局面が設定されている（落合、1987）。第一局面は江戸時代に開始される間引き・墮胎に対する圧力が増大した人口革命期で、これによってトリアゲバアサンのあり方が変容した。第二局面は、明治後期、トリアゲバアサンが近代医学教育を受けた産婆にとって代わられる時期。第三局面は第二次世界大戦後に開始される施設分娩の増加で、出産介助者は医師や病院勤務助産婦が大半

となった。

以上のような出産介助者の変化を説明する軸となるのは、出産観の変化、専門職化、分娩場所の変化、医療化、国家等マクロ社会との関連、地域社会等ミクロ社会との関連の変化であると言えよう。それぞれの変化の内容についてここで述べる紙幅はないが、いくつかについては次回以降に述べる予定である。

3. 常識と社会

さて、このように助産婦にとっての「常識」と社会学的研究とのあいだに違いが見られるのはなぜだろうか。家族を例にこれを考えてみよう。現在、家族は夫婦とその子どもによって構成されるものであると常識化されている。だが、歴史的に見ればこれは常識ではない。実際、社会学においては、「家族構成、世帯構成がどうだったか」という点と、「家族概念がどうだったか」という点の二点が研究の対象となる。つまり、社会学は、「実際のところそれがどうだったか」を明らかにする営みであると同時に、どのように常識が成立しているか

常識というイデオロギーの再生産によって社会が維持されるメカニズムを明らかにしようとする営みでもあるのだ。

もちろん、ここで助産婦にとっての「常識」がイデオロギーであると断定するつもりはない。社会学的研究の対象となるのは、

ある事象の真偽のみならず、むしろ「常識」が「常識」として受けとめられているという事実、常識を成立させる基盤なのである。さらには、「常識」が真であるならば、なぜそうなったのか（本稿でいえば「なぜ」出産は施設化、病院化したのか）という点も、社会学の一つの研究対象であるといえる。

4. 本連載の構成

しかし、これらの論点が読者一般の関心に沿ったものであるとは考えにくい。したがって、本連載では、先述したように、以下のような構成のもとに、社会的出産研究という一つの考え方を提示し、助産婦の実践がいかに社会的な営みであるかを明らかにすることがまず第一の目標となっている。

次回、第2回では、「歴史と助産婦」をキーワードに、一人のベテラン開業助産婦のライフヒストリーを、昭和・平成期における出産の一般的傾向の変遷という背景の中に追ってみたい。

第3回は「歴史と産婦」をキーワードに、同一地域で、40年という時代の開きをおいて開業した助産婦二人が残した助産録に基づいて、昭和初期から昭和中期、戦後から現代における産婦の空間分布を分析する。

第4回は「歴史と助産院」をキーワード

に、現在、妊産婦から強い信頼を受けている一つの助産院を組織論的、制度論的に分析する。

以上、明らかのように、本連載は病院出産が主流となって以降も妊産婦から絶えまない支持を集めている助産院に対する分析を中心として構成されている。本連載の最終的な目標は助産院のこれからのあり方について、間接的ではあるが、一つのイメージを提示することにある。

参考文献

落合恵美子, 1984, 「出産の社会史における二つの近代」, 『ソシオロギス』
, 1987, 「江戸時代の出産革命」, 『現代思想』

参考ホームページ

「助産婦さんに聞くお産のいまむかし」白井千晶
<http://www.waseda.ac.jp/littera/shaken/shira.htm>